

大洋州の交換経済

橋爪大三郎

1

太平洋中・西部にみられるいくつかの交換儀礼は、その特徴的な形態によって、とくに注目されるのではないかと思われる。ひとつの予想としては、Trobiand 島海域の kula 交換（円世）、New Guinea 高地の te/moka システム（総型）、Samoa の fa'alavelave（無定型）の3つが、あるタイプの社会のありうべき交換形態の3種の典型をとるものである、とも言いえよう。この予想をいちおう、交換の全域化に關する3極仮説、とよんでおく。

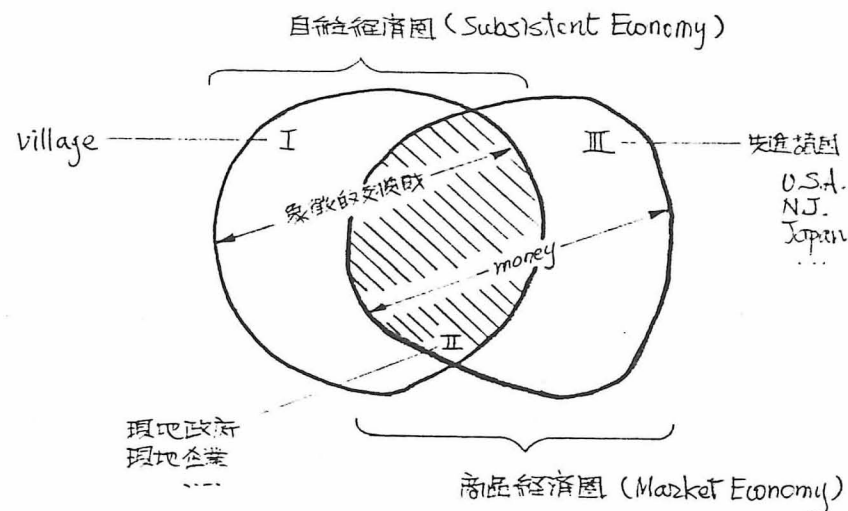
この仮説を検討するには、実証的な資料の積み重ねの点でも、理論的な裏付けを磨き上げるといふ点でも、今後ともに相当の作業が必要となることは言うまでもない。それゆえ、厳密な民族誌学的な根拠を用意するわけにはいかないのであるが——それには、商品経済に「感染」し汚染された交換メカニズムを観察するしかない、という制約も加わっているのだが——、以下では、少しあたりいま考えつく限りの理論から、ひとつの理路を織りだすことを試みよう。

2

「未開」社会や伝統社会を人類学者が訪れること自体、すでに汚染と破壊の相当進行した局面にその社会がみかかっていることの証左である。無垢の社会は人類学者の描きだす理想型のなかにとつてみかかれるだけなのだ。実証にかかると対象は、はや文化変容 (acculturation) によって、その「本来」の軌道を外れ

てしまっている。1940年代の終わりまで本格的な「文明人」の立入りを許さなかった New Guinea 高地にしても、そのわずか20年後には、ひらかれた道路を TOYOTA が走りまわり、さまざまな商品が商店の軒下をうすめて、人々の臍めを穿っているという光景が日常のものとなったのである。

こうして人類学者が目にする交換システムとは、ひと口で言うならば、自給経済圏と商品経済圏とが癒着したような、2重の構造 (twofold structure) を具えている。Samoa にもまた New Guinea 高地にも共通するものは、このような混合した交換の回路である。それを模式的にあらわすならば、



のようになるであろう。調査地を構成するのは、I・IIであり、古典的な人類学の記述の対象となす。従来の水準では、それは文化、すなわち社会にかかわる規範的な拘束を描きださうとする、定性的な作業であった。一方、IIIの領域、すなわち資本制経済圏で生ずる事態を解明するために成立した（近代）経済学は、II・IIIを併せて考察の対象とする植民地経済論を、その下位部門として撞いている。これらは、経済領域における文化変容の各局部に照準しようとしているが、その事態の全貌をつかむものではない。事態は、I~IIIを貫通する定量的な現象として生じているはずであるのに、それらを統一的に論ずる枠組みは、従来の経済人類学によっても、他のどんな議論によっても、与えられていないからである。

自給経済に外部から商品経済が浸透しつつある場合を論ずるのが困難な理由は、技術的にのべるならば、観変数を戻すことができない（できにくい）という点に求められる。この点をめぐる切り口として、New Guinea や Samoa

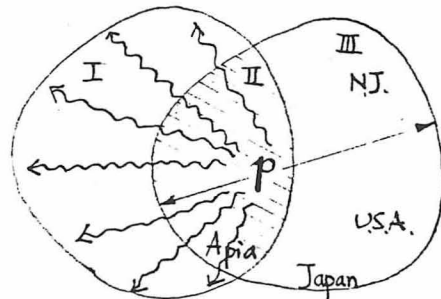
の研究例のいくつかを整理してみよう。

3

Fairbairn [1973] は, Western Samoa (1962 独立) の, 国民所得計算の試みである。これが通常の仕方と異なるのは, Western Samoa に広汎に残存する村落の経済活動を, 商品市場には登場しない自給経済部門として位置づけ, その部門にも商品経済部門と同様の重みを与えるようにして, 国内総生産 (Gross Domestic Product) を算出しようとしている点である。ただし, 自給部門の活動を評価・集計する際に用いられている変数は, Western Samoa 国内の市場価格であり, これが方法上の限界ともなっている。

手続きの全体は, 次のようである。商品経済部門は通常と同様にとり扱われる。その際の経済主体は, (主に外人である) planters, (主に混血の Samoa 人によって経営される) commercial enterprises, government, missions などであり, 各種の官庁統計や民間の簿記記録によってこれらの動静をつかむことができる。これに対して, 自給経済部門は, villagers によって担われている。彼らは, 若干の現金作物 (主にバナナ) を栽培して市場に出荷するが, タロイモやスタなど自給産品の大部分は, 市場を通らないうまま直接消費されてしまう。これらは実物量として相当のものであるが, 統計類には出てこない。そこで, Fairbairn は Savai'i, Upolu の両島から, 代表性のありそうな Taga, Poutasi の 2 村を抜き出して実地に調査し, これを根拠に Samoa 全域の自給経済について推定を下すという手段を講じている。そして, 自給部門の産出は毎年の市場価格によって評価され, 商品経済部門の産出量と合計される。

市場価格 p が, 商品経済とは本来無縁なはずの自給経済部門の集計単位とならなければならないのは, タロイモやスタなど自給産品の一部が, Apia の市場で (都市在住者むけ等に) 販売され, 価格によって価格づけられている, ということにおかれている。市場価格 p は, 仮想的に



自給経済部門のすみずみにまで浸透しているとみなされている。しかしこの仮想には問題がある。まず第一に, この仮想は, 自給経済を支える villagers の行動様式がどのようなものであるかを, 全く顧慮していない。実際には彼らは, 伝統的な社会規範に支えられた互酬的な贈与のネットワーク——fa'alavelave——を営んでいるのであるが, 経済学者としてトレーニングを受けた Fairbairn は, Western Samoa の生まれであるにもかかわらず, そうした事実を自分のモデルのなかに明示的に組みこむまでに作業を充実させることはなかったのである。第二に, 自給産品の市場 (II) は自給部門 (I) に較べてきわめて小さいため, 現在妥当している価格 (p) を自給部門 (I) にまで拡大するには, 無理がとも返う。これはたとえ, 現在各村落で自給的に生産・消費されているタロイモがすべて Apia の市場を経由することになったとしても, 現行価格は変化しないであろうとする仮定を含んでいる。言うまでもなく, これは無条件では成立しにくい仮定だ。自給経済が (仮想的に) 崩壊し膨大に広がるタロイモの需要/供給が, 拡大した商品市場のなかでどのような均衡価格に落ちつくかは, 予測を許さない。このような点を無視して現行価格 p を集計単位として用いるのは, 問題となっている研究状況を打開する試みであるとは言えず, 無方法の誘りを免れない。

4

Rappaport [1968] の試みは, Fairbairn の場合とちょうど対極的であると言いうるものかもしれない。というのは, Rappaport は, 自給的な経済活動を記述するための鍵変数を, 自給経済圏のなかから探しだそうとしたからである。こうして彼はみつけたのは, 自然生態学的な変数——カロリー——であった。

Rappaport [1968] は, 他の多くの monograph のように単に民族誌的な記述の精確さをねらうばかりではなく, 大胆な仮説的モデルを提示している。Rappaport が直接検討の対象としているのは, New Guinea 高地中部のうち, Maring 族の 1 分枝の居住区であるが, 彼は同区域の降水量, 土壌, 植生から始まり, 人口, スタの頭数, 耕作労働にかかわるカロリー消費, 食物構成にいたるまで, 詳細な生態学的データを収集した。社会の基盤には, ecosystem があって, 人間と環境とのエネルギー代謝を支えている。このように実物的な ecosystem は

観察可能であるから、研究者はそれを操作的モデル (operational model) のかたちにとりだすことができる。これに對して、当該社会の人々が抱いて居るのは、環境の認知モデル (cognitive model) であって、ecosystem 内での複雑な変数連関の決定的ないくつかの局面を、儀礼——特定の状況の出現に對して、ほとんど自動的に発動される一連の社会的手続き——のかたちに固定したものである。儀礼は、ecosystem の上にたち、当該社会が人口、スワの飼育頭数、耕地面積その他の諸変数を目標値の範囲内に自動調整するための、複合的な homeostatic mechanism の一部であるのだ。スワの屠殺とそれにひきつぐく往還は、スワの飼育頭数が ecosystem とバランスしうる閾値をこえた結果、儀礼によって命令された行為、としてとらえられる。こうして、交換儀礼を含むさまざまな儀礼の存在を、Rappaport は ecosystem にさかのぼって説明する。

Rappaport の議論は、「人口圧」論の現代的な形態とみてよいだろう。たとえば彼は、支持人口に関する Carneiro の公式を援用している ([1968:285]):

$$P = \frac{T}{R+Y} \times Y$$

すなわち P: 支持人口
T: 全耕地
R: 休耕期間
Y: 耕作期間
A: 「平均人」1人を扶養するのに要する耕地面積

類似のさまざまな公式とカロリー計算が、彼の操作モデルをかたちづくる。彼が自分の作業を、Dürkheim, Homans, Merton を援用しながら、「機能主義人類学」と自在している点は措くとしても、自給経済の自然生態学的な制約を抽出しようとする視点その自在は、十分評価に値すると言えよう。しかしそうした実物的な変数関係のうえに、ただちに儀礼のような社会現象を位置させようとするのは、問題が多い。文化領域が、自然生態学的な制約によつては規定しつくさぬ限り、十分な自由度をもつことは殆ど確實である。多分その事実を反映して、ecosystem との関係に焦点を絞った Rappaport の分析は、Strathern [1971] と同年代の研究者のモエラオ民族誌的なデータの微細な諸点を、押しあげようにはなっていない。

Rappaport は、経済活動に先立つ ecosystem のなかから、説明のための鍵変数をえらびだした。だから、もし彼の試みが妥当であるのなら、伝統的な自給

経済であるかと、商品経済の浸透にみまわれたとの変容形態であるかと、一貫した立脚点にたつての発明的な努力が可能だったかもしれない。しかし、変数の選択とモデルの設定は、妥当でなかった。社会が、まさに交換の体系、全体的社会的給付の体系たることを見据え、そのなかから適切な説明形式を求めざるべきであったのである。

5

以上 Rappaport [1968] が比較的交換形態の説明に無頓着であったのにひきかえ、Thompson [1979] は、大変に大胆な交換システムのモデル化を試み、しかも一応の「成功」をおさめているとも言える点で、一層の注目に値しよう。

Thompson は、New Guinea 高地の人々の個別的な交換行為が、全域的にはどのような効果をおみだすかについての、数理的なモデルをつくりあげた。これは紙幣な自給経済（先の図でいうと、I の部分）をモデル化するものであるが、他に類似をみない定量的なマクロ一干である。彼は、4年周期をおこるスワの屠殺を、当地の交換メカニズムに必然的に由来する、カタストロフによって説明した。この首理は、データの面では Meggitt [1974] に、またモデルの面では E. C. Zeeman と、そしてもちろぬ R. Thom とに多くを借っているのであるが、その点を割引いてもなお、ユニークな試みである。

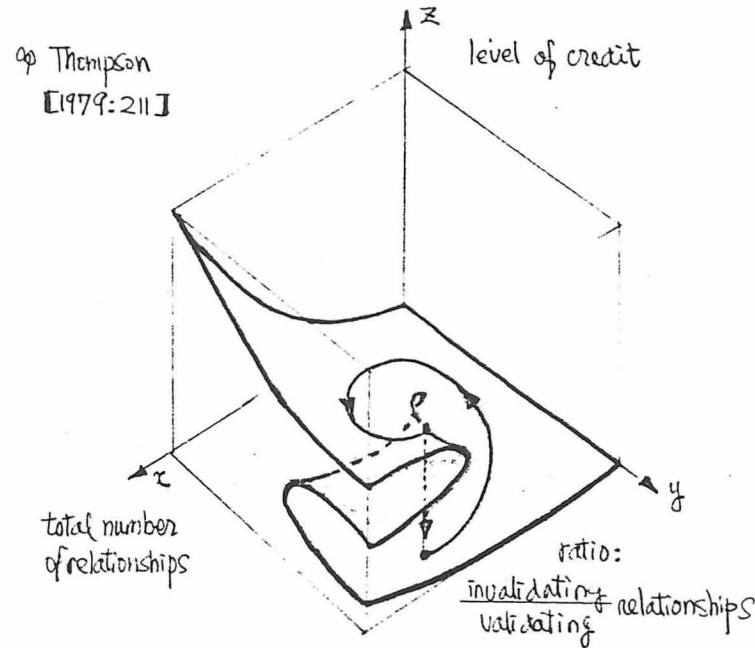
Thompson [1979] の巧妙な点は、New Guinea 高地の全域を貫通する交換システム——多くの異なる言語を話す人々のあいだをたぐらぬく径路なので、場所によって呼び方が異なるのであるが、併せて te/moka システムと呼ぶことにする——のなかから、うまく3つの変数をえらびだしたところにある。周知のよように、カタストロフ理論は、2変数によって第3の変数が規定される関数関係の1種——モース関数——の特異点集合が、7つの型に類別できる、という内容のものである。Thompson は、周期的なスワの屠殺を説明するモデルを組むために、3つの変数 x, y, z をつぎのように定義した:

x : 信用取引全体の数

y : $\frac{\text{リニデイデオロギーによらぬ信用取引の数}}{\text{リニデイデオロギーによる信用取引の数}}$

z : 全体の信用取引のレベル

全体の信用取引の本準 (Z) が、アタの飼育頭数を決定する。すなわち、Z の下落 (ΔZ) は、アタの層数をいみするのだ。
 (アタを飼ウのは書の仕事であるが、手間もかかる。) x-y 平面は、これに対するコントロール平面を与える。Thompson は、te/moka システムをみまう周期的な波動が、櫻 (カヌア) 型のカタストロフィにしたがうものであることを示した。



ひとつの狂宴が終ったあとでは、アタは、繁殖に必要な最低限度を除いてことごとく屠殺されてしまっている。やがて、誘い木の贈与 (solicitory gift) がはじまり、1年ぐらゐるとその返礼 (アタヤ貝ガラなど、はじめの贈与の教信へ10倍) が行なわれ始める。これら贈与を主導するのは、big men である。big-men は local な lineage segment に基盤をおりているが、貝ガラやアタを与えることによって威信を高め、その威信をもとでますます多くのアタを動かすことができるようになる。アタの飼育チームが広がるにつれ、婚姻交換に基礎をおいた堅実な贈与の授受の比率は低下し、big-men の個人的な才覚にもとづいた冒險的な信用取引の割合が増加する。信用の膨張が極に達したとき、アタの飼育ゲームは急速に崩落し、さきの狂宴とは反対の端に集積されてしまった沢山のアタが屠殺され、料理される——閉塞した交換ルートを再生させ、ふたたび互酬性の輪を広げるために。

Thompson のモデルでは、変数 y のえらび方がことに絶妙であり、交換システムにおける big-men の行動をたくみに表示するものとなっている。そのため、周期的な屠殺というような、交換システムにおける振動の発生を、一極の信憑性と象証的な振返をもって、説明するモデルを据えたと言つてよい。しかし、

過度の単純化のため、重要な民族誌的データのいくつかは無視されてしまっている。たとえば、各種貝ガラのはたらきの差異、リニジャクランの同盟/敵対関係、戦争の役割、部族ごとの地域差、交換の重層的な構造、など……。信用取引のレベルという変数をたてる、などの抽象が、議論の精度をさわめて粗いものにしてしているわけである。

Thompson のモデルは、ある種の自給経済の有効な図式化ではあるが、そのままに (たとえば &smoot) 適用可能、というわけではない。のみならずこれは、(おそらくはカタストロフ・モデルを導入しようとする意図の性急さのあまり) te/moka システム自身の基本的な、十分に複雑な様相——そのいくつかは後述される——をことさらにとりおとしている。しかもこれは、商品経済との接触によって生ずるほかはない te/moka システムの変容について、なにひとつ語るところがない。要約するに Thompson [1979] の試みは、①自給経済圏を自身の百かから (数量的な) 変数にとりだしている、という点で評価できるものの、②そのモデルがさまざま民族誌的データに適用できるまでの一般性を欠いており、③モデルとしての精密さ (データとの fitness) に欠けるうらみさえある、と言えるであろう。

6

以上検討した3つばかりの試みは、太平洋のこの地域に存在するいくつかの社会の経済メカニズムをこれなりに、定量的に扱おうとする試みであった。こうした試みは、これ自体数少なく、したがって十分に異色ではある (したがって検討するゆりがある) のだが、すぐ採用することができるほどわれわれの目的に適う試みではない。象徴財を含み、社会の全体を蔽うような交換メカニズムは、かならず量的に現象するのだから、定量的なアプローチは (ある局面では) 不可欠となる。にもかかわらず、既存の研究例の反かに、そのままわれわれの議論に役立ちうるものが見当たらない以上は、われわれ自身の手で然るべき工夫を講ずるよりないであろう。

山本泰・山本真鳥の両氏は、1978年以來 Western Samoa において、現地の伝統的な交換システムを調査・研究中である。一部既報のように (山本 & 山本 [1981]), この作業はきわめて興味ぶかい結論をつづぎにうみだしつつあるが、

その一方でなお未解決の課題、未着手の課題も少なくないときく。わたしの知るかぎりでは、そのなかのひとつとして、Samoa固有の交易財 'ietoga、とくにその交換に対する規範的な拘束力をどのように考えるか、という重要な問題がある。その最終的に解決のためには定量的なアプローチをとるしかないと思われるのだが、あいにく在来の人類学の業績のなかに類例をさがさうとしてもむだらしい。じつは Fairbairn, Rappaport, Thompson らの仕事に目配りをしたのも、このような仕事に役立つような文脈からであったのだが、すでに見たようにそれはかえってこの問題のむずかしさを浮きぼりにするだけにおわっている。Samoaの交換経済、とりわけその 'ietoga 問題に実際どのようにアプローチするかについては、別にその試行のアウトラインを示しておいた(橋爪[1981])。内容が解明に技術的な論議に、あるいは多岐・細部にわたるからである。以下では、太平洋海域、とりわけ Samoaの交換システムについて、むしろ概略的にのべうるかぎりのことをのべよう。

7

New Guinea 東部の海域において大規模に営まわれていた交換経済、今日 kula の名であまねく知られてきた交換メカニズムを紹介した好書『西太平洋の遠洋航海』において、Malinowski はつぎのように予言している：

《このような新しい型の民族誌上の事実が見つかったのだから、似たような型のものが、どこか他の地で見つかることを期待してよいだろう。……(中略)…… われわれが注意してさがるべきなのは、交換し、取引される貴重品にたいして、うやうやしい、ほとんど崇拜するような態度をあらわす経済取引であり、一時的、断続的、累積的な新しい型の所有を含む経済取引であり、巨大な複合的な社会機構と経済事業をともなって遂行される経済取引である。》(〔1922=1967:336f 1])

この当時、New Guinea 高地の諸民族は、まだ「発見」すらされておらず、その他の交換システムについても、目ぼしい報告はほとんどなされていなかった。その後の、ことに構造主義とそれ以降の研究動向におもいはせるとま、彼の

予言の通りであったことに、驚かすにはいられない。

太平洋海域の諸民族の現状がどのように由来したものであるかについて、必ずしも詳細な民族史的事実が知られているわけでもない。しかし、記憶しておいてもよいのは、それらがいずれもきわめて「最近」の出来事に属することである。たとえば、New Guinea 高地に(タロイモにかわ、こ)サツマイモが導入されたのは、わずか300年前のこととみられているわけだし(Meggitt [1974:197])、Hawaii など島嶼部へ人々が進出していったのも同様にさほど古い時期のことではないのである。こうした事情は、伝播説(diffusionism)に力をかすものであるか? そうではあるまい。たとえば、Samoa はごく近い時期に隣接する Tonga から分離独立したことが知られているのだが、両者の社会構造は、多様なこの海域のさまざまな社会のなかでも、まさに互いに対極に位置するもの、と考えられる。山本真島[1976]も指摘するように、一方の Tonga は、もともと堅固な王制によって知られ、社会の全体が位階秩序的な親族組織のピラミッドによって固められているのに対し、もう一方の Samoa は、そのような位階制にもとづく支配の契機を極小にした、互酬的な交換の網の目によって蔽われているのであるから。こうして、この海域に散らばる多数の社会の一連の形態は、伝播や派生関係にもとづく無数のいくつもの系列をあらわすというよりは、ほぼ類同の条件に規定されている社会の可能性の全体、一連の順列・組合せの代数的な全体(algebraic whole)、と考えたほうが、はるかによいだろう。

こうして、Malinowski の予想を、kula 交換システムに対する「構造的多様性」の存在予言命題と、よみなおしてみることもできるかもしれない。そして、ちょうど Lévi-Strauss が限定交換システム / 一般交換システムのふたつの異性を婚姻交換に関して発見し、それらを同一の構造原理(互酬性の原理)へともう一段さし戻してみせたと同じように、われわれも、この海域における交換システムのいくつかを、あたかも構造的多様性体でもあるかのように、並列し比較してみるとそこから何を始めるのがよいのではなかるか?

8

ここで比較・対照することになるのは、Samoa の fdalavelave, New Guinea

高地の te/moka システム, Trobriand 島海嶺の kula であるのだが, これはさきの 3 種仮説にもとづくものというより, せいあたりはむしろデータの制約によるものである。これらは, 人種, 言語, そのほかの系統の違いもあり, ぶつづには互いに^{ギャップ}変異体であると括られないようだが, ここでの理論的作業にとってはこうした「通説」はこの際どうでもよい。

比較の内容を簡明に示そうとすれば, 次の表をうる:

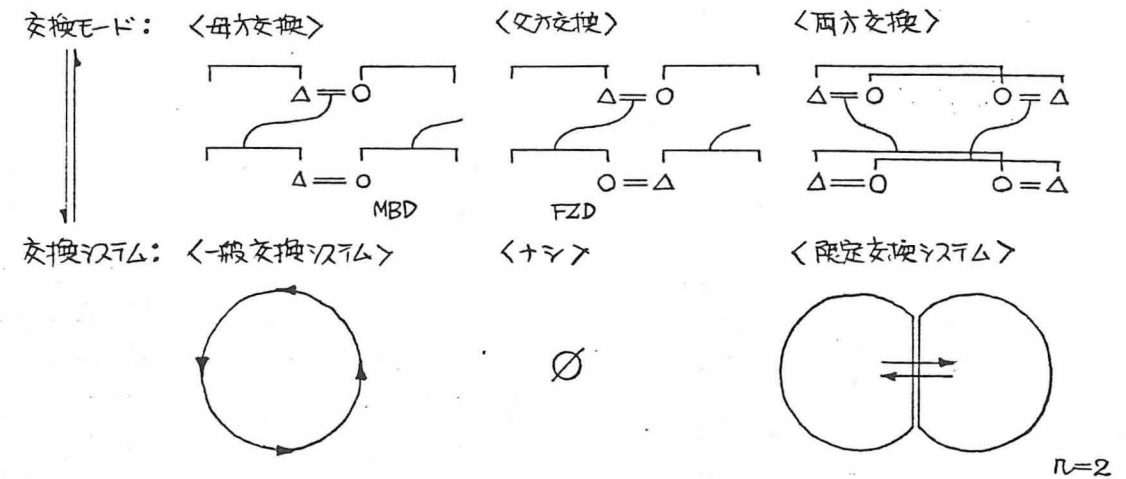
<項目>	<Samoa>	<New Guinea Highland>	<Trobriand>
交換システムの名称	fa'alavelave	te/moka	kula
" の形質	network	linear	circular
" の単位	land	land	isla
交換財 (+ 象徴財)	タタ } 'ie toga*	スタ } shells*	貝の腕輪* } ウエギク的首飾*)
自給作物	タロイモ	サツマイモ	芋イモ
交換財の種類 (女財) (男財)	toza/oloa (女財) (男財)	同一財 (タタ + shells)	異種財 (腕輪 ≠ 首飾)
交換の時期	同時	時間差	時間差
親族集団	'aiga (cambilineal) -exogamous-	lineage segment (patrilineal) -non-exogamous-	subclan (matilineal) -exogamous-
交換のリーダー (+ 言説の配分)	matai } ali'i } tulafale*	bigman*	chief*
優先順位 の所在	taupo, 並に 婚出宮 (乙)	婚入宮 (W) WB, MF	妻 (W) (乙)
交換の性格	婚姻交換	婚姻関係にもとづく 交換を多く含む	婚姻関係とは 無関係
交換に関する範囲	全 Samoa	言語・文化を異にする 多数の部族	言語・文化を異にする 多数の部族

以上は, 比較すべき諸項目には人の概念的なみとりを与えたにすぎないが, これでもそこから, 全体の「家族的な類似」をうかがうことはできるだろう。「交換」という行為はそのつど対等の相手方を必要とする, だから, 社会が最終的に交換システムとして秩序づけられる場合には, 各人が, (いずれこの社会においてもそうであろうように) 権力や利害状況にまきこまれるのと同様以上

に, 交換へと志向し, 交換儀礼のなかで自分の全存在を投入して値しまない, というようになっているのでなければならぬ。実際, これらの社会はそうである。Samoa の例は措くとして, たとえば New Guinea 高地 (Mae Enga 族) では, 子供たちはトサいうちから, 遊んでいないで父の番や畑仕事などをするように言われるが, 「Big Man ごっこ」や「te ごっこ」としているときは大目に見られるという。また, 土地を息子に分与してしまい, te の交換儀礼も満足にできなくなつて萎縮してしまつた Mae Enga の人々の老人ボケの症状は, まつて, かつて行なつた te の自慢話と線りごとである (Meggitt [1974: 183, 185])。しかしこうした人々の強固な動機づけは, それ自身, 交換システムを構成する要素的な構成要素であるわけではなない。こうした主体と主体性もまた, この交換システムと同時にかたづけられる, その不可分の一部である。

9

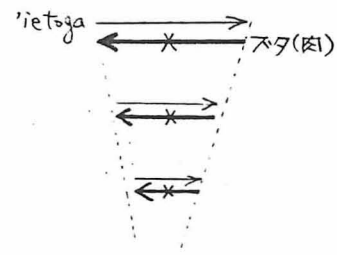
必要な作業は, 交換システムの各部分を観察される個々の局所的な交換の様相と, それらが集合的に帰結する全体的な様相とを, 適切に関係づけることであろう。ちやうど Lévi-Strauss が, 交換の基本モードと (全域的な) 交換システムとを関係づけたように, その関係を再録してみるならば:



のようであった。これに相応する交換モードは, 既出の各交換システムを扱う民族誌のなかからさぐりあててみることができよう。

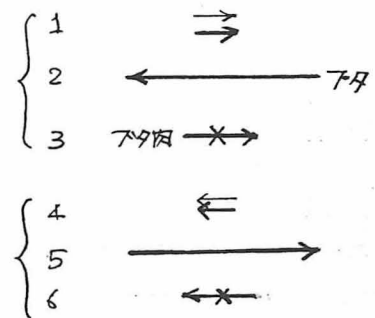
Samoa の儀礼的な交換は, 象徴財 'ie toga によつてもっともよく特徴づけられる。'ie toga は, いくつか付随的な用途に用いられるものの, 基本的には婚

姻交換財(女取つ)である。Samoaにおいて、すべての交換が婚姻交換(ないしはその反復)として営まれると言てよく、それは別のジャンルに属するような交易活動のたぐいは(少くとも伝統的には)存在しない。象徴財である 'ie toga は、それと対当する実体的な財、ヌタ(の料理)と同等的に交換される。主食であるタロイモが専ら 'aiga 内で自己消費されるのに対し、ヌタは自己消費の禁せられた「戦略物資」であり、専ら fa'alavelave の交換の場面に登場し消費される。こうした交換状況を模式的に図示してみるなら、右のようになる。この交換の両当事者である 'aiga は、(婚姻=交換)禁止のはたらきによって、次々に互いの相手を random に更新していく、すでに交換のひらかいている 'aiga とは、再び(婚姻)交換をかわしてはならないのである。



交換は、婚姻による結びつきによって、'aiga 同士の間だけで済む。以後たえることなく継続していくは下であるが、やがて後述する交換の場面に移行する。

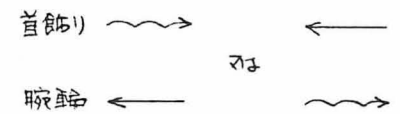
New Guinea の te/moka システムの場合には、交換財の種類が Samoa と共通するものの、そのジャンルが (toga/oloa のように) 分化している。Pearl Shell をはじめとする一連の財が象徴財として通用するが、それらはヌタと組みになって、交換財を形成する。一層精緻であるのは、交換財の交換が当事者のあいだで周期的に行なわれることであろう。その基本的なパターンは、右に示されているところである (Meggitt [1974:131])。はじめの段階では、仔ヌタ、ヌタ肉、塩、魚、各種貝殻、羽毛などが、手始めの贈与 (initiatory gifts) として送られる。交換の当事者らは地理的にも順におおむね縦糸に並んでいるのであるが、この贈与が数年かから、一端から他の一端に達すると、主たる贈与 (main gifts) が他の一端から開始される。これに対しては、お返し (return gifts) が、生きといるヌタ 1 匹に対してヌタ肉半割分の割合で、配当される。それ以降は、はじめと反対の



上は, Epa 族の te moka での moka についての報告はもう少し詳しい。

方向で手始めの贈与がはじめられ、以下 4~6 と先程と反対向きの交換がづづいて、両方向一巡するのに 8 年ほどを要する。

Trobriand 島海城での kula の場合にも、交換の各当事者が互いに固定して、地理的に位置している点は、te/moka と共通している。しかし、その交換経路は円周状であり、したがって te/moka の場合のような明瞭な周期性を欠く点、さらに、ヌタやイモ類のような実用財が交換品目のほかに登場して二つの端が互い違いしい対照をなすといえよう。交換財は、2種類の象徴財からなり、その互いの周回方向が一定している。kula の相手方の集落にカヌーで乗りつけた一団は、首飾り(または腕輪)を受けとる。それは次の機会に、それに相当する腕輪(または首飾り)によって返済されなければならない。



kula が確立するのは、純粋な互酬性の円環であり、各地の特産品を交換する実用的な交易とも、各島の部族社会内部での交換メカニズムとも切断されている。Trobriand 島に関して言うならば、主産品であるヤムイモとい自体が、婚姻交換の一環として、姻族 (ZH) のもとに運ばれる。カヌーの製作などのほかの共同労働も基本的に、この婚姻交換を介して調達されるしかないのであるが、各村落の首長は、多くの妻をもつことなどを通じて、このシステムの頂点にたつ。kula を主導するのはこの首長であるのだから、kula は各部族内部の交換メカニズムによる、もう一段下から支えられていると言てよいのかもしれない。

10

さて、以上のような各様の交換モードが当該社会の各所を埋めつくすとき、そこに描き出される交換システムを、どのようなものと解すればよいのであろうか?

このような交換のメカニズムは、基本的に言って、すぐれた「政治的」な性質の作動をするものと考えられる。それは、権力があまりにもむきだしに自らを露呈させてしまうことをおしとどめようとする、ある程度の仕方であるのだ。われわれは各社会の交換システムを、権力に関するといふものの空間の、固有の

基本戦略に立つものとして理解しよう。

ミクロネシアを中心とする太平洋海域に点在する諸社会には、いわゆる非単系的 (nonunilinear) もしくは複系的 (ambilinear) な複雑組織が展開している。Samoa の 'aiya 系、そのひとつにかぎえられるであろう。Samoa, New Guinea, Trobriand の諸社会に共通する特徴は、その自給経済がイモ類の栽培による支えられているということであり、その経営単位・協同集団として、各社会に血縁=地縁的な居住集団 (local group) が存在している。父系 (New Guinea), 母系 (Trobriand), 複系 (Samoa) という違いこそあれ、それらは各居住集団に人間を配当する規則に他ならない。

ところでこのような、イモ耕作のため排他的に一定区画を占有する居住集団は、相互に利害の共通性をもたない。木利の必要に応じて共同性を示しており、潜在的にはむしろ敵対関係をかくしも、していると言えよう。耕作地域が限られた島嶼部の社会では、複系制 (ambilinearity) のように、世代間に居住集団のサイズを調節するメカニズムを蔵していることが、きわめて適格的であると思われる。これに対し、周囲の荒地から際立つ肥沃な耕作地が限られている一方、居住集団への帰属が系譜原理によって一義的に指定され、互みかつ言語・文化を異にする多数の部族がみしめく New Guinea 高地においては、耕作地の争奪に起因する戦争が恒常的であるのは、むしろ当然であると言えよう。交換システムがその背後に控えているのは、このようなより集體的な (人間と社会の) 破壊である。

経営単位である居住集団相互の反目が、それらをより大きな単一の (血縁的な) 統合原理のなかにとりこむことによつて、吸収・支配をまけてしまうようであるなら、問題はない。これはたとえ、Tonga の場合である。これもひとつの空間の戦略であるが、そのためには空間の全域を rigid に織りあげ、権力の中心を析出させなければならぬ、というようなことになる。交換システムの戦略は、これとは異なる。これは、居住集団を構成する血縁=地縁的な原理から逸出しようという契機に自らを賭けているのである。Samoa の 'ie toja, New Guinea の Big-Man, kula 交換の場合の交換財の選択などに、この点があらわれている。

交換システムが主題としているのは、端的に言つて、破壊 (= 屠殺 = 腐敗 =

料理) である。この破壊は、それが背景としてより実在的な破壊の行儀であることによつて、その力を獲得している。交換儀礼は、このようにながしかめ破壊的な行為であるが、それは威信 (社会的な価値) へと転化する。人々は威信と力を求めて、交換へとひたすら勤めつけられることになる。しかし、破壊的な行為はそれが破壊的であるという理由によつてただちに自動的に威信へと転化するわけではない。それには、そうした行為を威信へと読みかえるコードが介在することが必要なわけだが、そのような解釈コードにしては個々の交換行為とまったく同様に交換システムに内属しており、疑われないながらもその節度再発見されたいくはずのものであるから。威信の発生を自動的なものと信じさせる (ように解釈コードへの信頼を殆どゆるぎないまでに強かなものにする) エキが、交換のスペクタクルとしての要素である。交換においては、みるということが過剰にも要求される。Trobriand 島において、山と積みあがらぬ展示される、ヤムイモの収穫。あるいは kula 交換のため茶波を横切るカヌーの装飾。さらには、te/moka に際して、一列にならべて繋がれる無数のフタ。こうした見せ物は、交換システムが用意してみせる、殆どありえないはずの社会の露頭である。

11

te/moka システムの体现する空間の基本戦略を、なお詳しくみてみよう。

New Guinea 高地の場合に問題であるのは、ひとつには、サツマイモの高生産性であると思われている。サツマイモは、タロイモを駆逐したところからみて、生産性においてすぐれている (あるいは、この地域に適性がある)。しかもこの作物は、フタの飼料としてもきわめて効果が高いらしい。

New Guinea 高地は大小さまざまな部族によつて構みわけられているが、それら部族がまた大小の clan, subclan, lineage, lineage segment に分かれている。これらは (おおむねその分出関係にむじて) 伝統的な同盟関係、敵対関係の市松模様に染めわけられている。彼らの間には2種類の戦争——小さな戦争と大きな戦争と——が区別されているが、前者は非戦闘員を殺さないもの、後者は女・子供まで皆殺しにする殲滅戦にほかならない。戦争に敗れた集団は、居住地を捨てて同族部の荒地に移るか、同盟する集団の間に逃げこむかするしか

ない。このような敵対関係は、イモ耕作集団相互の反目を適切に反映するものであると言える。

ここで、スタについて考えなければならぬ。スタは、(島嶼部とちがって漁獲物の補給のときか厚いこの地帯にあっては) 欠かせない蛋白源(のひとつ)であると信ぜられる。スタの飼育は女(W)と子供の仕事であるが、これは、柵で囲ったサツマイモを与えたりの大仕事で、なかほかの重労働であるらしい。とくに(Samoaのように逐次に屠殺するのでなく) 且一杯にスタを殖やそうするため、この事情は加速される。スタ飼育の効果は、少くとも2重である。ひとつにはそれは、人間のかわりにサツマイモを喰べつくし、それが自身再び人間に喰べられるという中間項であり、イモ栽培をめぐる居住集団間の抗争を抜き差しならぬ切迫した水準よりはゆるやかなある水準に設定する戦略変換である。 (この点では、Rappaport [1968] の着眼は評価にたえるといえる。) もうひとつにはそれは、保存性と可動性とも具えた実体財として広域にわたって作用することのできる社会関係の媒介子(operator)として、登場する。サツマイモは、生育に6~9ヶ月を要し、そののうち9ヶ月間は保存の効く食品であるが(Strathern [1971:9])、スタがそれをまたかにしのぐ動産であるのはむろのことだ。このような2重の効果とともに、交換財としてのスタがその像を結ぶ。スタは富・価値・良きもののお宝である。

スタは、(手始めの贈与に応じて) 生まれたままに相手方に渡される。これは、相手方に対する信用の直截な表明であると同時に、交換経路の線条的な連続性、交換のタイミンクの同期、富=スタの集積、を可能とする。集積されたものは行き場のないスタは、片端から順に屠殺=破壊されなければならぬが、この肉は交換の両当事者のあり方で折半されるかたちとなるのだ。

このte/mokaの交換を総括主導するのが、Big-Manである。Big-Manは、自分の属するlineage segmentを基盤として活動するが、その集団の首長であるわけでも、世襲的な地位を根拠にしていないわけでもない。彼はその才覚によって、同盟関係にある他のclanばかりか、敵対関係にある集団にまで交換のパートナーを掲げていく。Big-Manの死は、交換ルートの途絶を意味するから、それが毒殺・咬殺であるのかないのか、調査が行なわれなければならない。嫌疑は主に、敵対する集団やBig-Manの妻の出身集団に及び、しばしば抗争を

偏結する。

New Guinea 高地では各種の貝から、最近ではPearl Shellが、象徴財として有用にはたらくてきた。これらは、この地域の外部から移入されたものである。これら象徴財は、実用上の有用性を欠いているが、交換システムのなかでスタと対当させられることによって、交換財としての位置を占めている。象徴財のはたらきは、いまひとつはっきりしないところもあるが、交換経路のなかに一定量分布していて、周期的に絶殺をいちぢるしく変動させるスタに対して、価値の一定量を表示する手段たりていていいのではないかと思われる。実際、それが数量的に交換システムを規制しているのはたしかである。白人が大量にPearl Shellsをもちこんだ時期、いちぢるしいインフレーションがみられた。

te/mokaシステムにあっては、動産はスタのかたちをとって居住集団から外へとあふれだしてゆく。しかもその方向はくりかえし逆転する。与えるもの、実利を手離すものが、威信の上で優位に立つという原則は、スタと威信との同時的自集中を妨げる。スタが破壊=屠殺されるときには、集中の危険もまた解除される。財と威信の配分は、相互に線条に配列され、たがりに連繫しており、恣意的な脱軌から守られている。

12

kula 交換の特徴は、実用財(ヤムイモやアサ、各地の特産品のたぐい)がほとんどあるいは全く、交換品目に含まれないことである。この事実は、いかなる空間の基本戦略をうつつしだすものだろうか?

kula を極に参与している各島の社会はそれがいかに独立した、自給経済を営んでいる。Trobriand 島なら Trobriand 島で、その内部ではまた独自に交換システムが営まれているとしても、これらの産品は海上経路へと持ちだされてこない。カヌーの積載能力や島嶼間の空間的な隔たりなど物理的な制約によって、各島の社会が有知な経済的連繫をつくりだすことは、事実上不可能であると思われる。そのように、相互に影響を与えあうことのむずかしい社会同士であるとすれば、之に交換システムの存在すること自体すべからず無理ではないだろうか? しかし——ここから先は推論であるのだが——社会の相互関係には否定的な関係というものもある。カヌーによつて周回可能である社会という

ものは、攻撃可能な対象でもあるのだ。未知の人々に対する敵対関係というの
が、この海域の常態である。見知らぬ人々と kula を行なおうとして、あるいは
漂着した輩向に、カヌーごと全隻殺さい、喰わいてしまった話 (Malinowski [1922=1967:242f])。相手が kula 交換のパートナーであることが、安全の保障
につながる。とゆえこの海域の諸社会は、厳密に交換であることに自足する
ような交換の連鎖を結ぶことにより、非敵対的な相互性を可視的なものとする
ことができる。このような交換の連鎖を、2種類の象徴財が可能とするだろ
う。とゆえはいずれもカヌーに積みこめる程に重たさがあるのだが、kula
交換の円環のなかを、もう一方の象徴財とひきかえられることをも認めながら、
互いに反対方向へと周回して行くのだ。贈与と決済とは遅延するため、このメ
カニズムは、空間の各所に、つねに同量の負債と信用貸与とをふりまきつづける
ことになる。

kula のこのような交換の円環は、たとえば Trobriand 島内部の交換の円環を
投影したものにしている。ともいえる。ここでは、スタは必ずしも New Guine
a の場合ほど大きな力をもち、人々の関心はヤムイモの生産に向けられて
いる。ヤムイモは、主要な自給産品であり主食であるのだが、自己消費は禁
じられている。自分の畑で栽培した収穫は、わざわざ姻族 (ZH) のところにま
で送らず運ばないべからぬ。(自分の消費分は、WB によって持ちこたえる
。) あま、さえ、ヤムイモは美学的な消費の対象とさえある。とゆえ、過剰に
生産され、積みあげられ、商取引に至るまで展覧されるのだ。このような婚姻交
換のルートを通じて、生産的な用役は従業に帰してゆく。これはこの空間の戦
略の然らしむるところでもある。各々は、婚姻交換に即して自給作物を移転
させ、象徴財のたすけをかりることなくとくに象徴的な解決を見出して
いる。ここぶとりのけとあかいた象徴財は、そうした血縁=地縁的な生産集団をな
みだすより大きな空間の演算子として、はたらく余地がある。ヤムイモ畑の耕作
にせよ、またカヌーの建造から kula 交換の儀礼にせよ、いずれも複雑な「呪
文」によってまといわれており、つまりは同じ解釈コードによって支配されて
いる。

Samoa 社会の空間はまた、権力の突出を解除するための固有の技法 (tactics)
によってみだされていく。この精緻な空間のトポロジーと性格づけを二とを
試みよう。

Samoa が前二音と異なるのは、とゆえに多数の部族からなるのではなく、単一
社会であるということだ。問題はこの空間の内部を完結し、この空間の内部
で解決されなければならない。タロイモとスタは、自給産品を生産するもの
は、系譜的にはルーズな出自集団 ('aiga) である。この集団の血縁=地縁的な
集結原理 (title system) と、婚姻交換が体现する互酬原理とを、さらに、互いに
交差させることから、すべてが出發する。(moka 交換を行なう、例えは Enga
族などでは、このような明確な分離と交差はみられない。Strathern [1971])。一
方で matai title は、生産的な居住集団の集域的な集結原理にかかわる、仕組ま
れた稀少性であり、もう一方で象徴的な交換財 ('ie toga) は、股関節的な互酬原
理にかかわる、仕組まれた稀少性である。'ie toga は、空間の各所でまんべん
なく生起する婚姻——性の禁止/消費——と、あらゆる形の経済活動、あらゆる
財の浪費の形態——財の禁止/消費——と、結びつける接合子 (connector)
である。

ここでも交換システムが照準する主題は、破壊と浪費である。常食であるタ
ロイモも、また漁獲物も、決して過剰には生産されないようにみえるかもしれ
ない。とゆえは(主要な)交換財としては、登場しない。しかしスタは、とゆ
えに許す余剰をあらわす。スタが消費されるのは、贈与されるときに限られ、
スタが贈与されるのは、料理=破壊されるときに限られる。あらゆる機会をと
らえたまんべんないスタの屠殺=破壊は、空間をも、とも緩慢にわたる権力
をみだす。ここでも実財の破壊と浪費と贈与、要するにこの浪費が、はじめ
て威信へと転化するのであるが、実財の過度な集積、絶大な威信の獲得へと
至る途が慎重に除かれている点だ。Tonga や te/moka の場合によく注目し
よう。スタに相当する交換財といえは、'ie toga であるが、この 'ie toga とい
う象徴財がまた、無用に浪費された生産的な用役の凝集である。この手の二ん
だ、実際上何の有用性ももたない加工品は、とゆえ自体破壊と浪費の、とゆえ
威信の、象徴的な作用素なのだ。fa'alavelave の交換儀礼のなかで、この 'ie
toga は女から男へ、スタとは反対方向に移転され、互いに異質なものと

して認知される。te/mokaやkulaの遷延した交換と対比すべき二の即時経済は、男方/女方に威信の格差をのこすことがない。さらにまた、(十分な確証がないが)ie togaは'aigaを支えるtitle systemの發揮する権力作用を、中和する働きがあるように思われる——matai titleは、ali'iとtulafaleとにわかれているが、mataiの執事兼任式(Saofa'i)の際には、大量のie togaが出席したtulafaleらの手に渡りまわりである。このmatai titleの二重化、及びtulafaleへのie toga贈与は、'aiga(に基盤を置く領域的な権力体)の権力の頂点を融解しようとする戦略の一環とも、みえるのである。

Samoaの社会のように、個体が主体として析出することを阻止する空間戦略の徹底している例もめずらしい。そこでは、空間が見わたせること、見通せることが、基本的である。ひとは、個体や主体であるより先に、'aigaや交換システムの与えるトポスに対して、忠実でなければならぬ。('aigaという出自集団自体、patrilinealでもmatrilinealでもなくtopologicalに構成されている。) 'aigaの内側から'aigaと'aigaに属する人々をみる時、それはどこまでも透明である。これは一種の機械を連想させるところがある。たとえば、妊婦が死した場合(胎児が墓から取れだして復讐する霊となることのないように)公然と(子供も大勢視ている目の前で)屍体を斬りひらき胎児をとりだすという施術が、伝統的には行なわれた。また、「死因を捜すため死体を切り開く手術」というものを存在した(Mead [1961=1976:127])。このような解剖(anatomy)への偏執の前では、'aigaに属する個々の人々の身体など、保存すべき個性の依りどころでもなにもものでもない、と思われる。

(戦争をのぞいて) Samoa社会での最大のeventとは、おそらくfa'alavelaveだともなうアタの破壊=屠殺であろう。五渡きのスタの丸蒸し料理は、男たちの仕事である。スタに関わる破壊と解体が、かくも「政治的」に扱われることの背景を、たとえばつぎのように読み解いてみることはできているであろうか——New Guineaでも、Trobriand 島海域でも、また Samoaでもそうであるかもしれないが、スタは、イモを喰い、畑の上を歩きまわる脊椎動物、とう、もうひとりの<人間>である。スタ料理は、ようやく避けることのできた食人(canthropophagy)、もしくは、すんでのとこでのかした人肉嗜食の代償なのである。スタからスタの破壊が、記号的な意味作用を發揮するとすれば、それは、そこ

に不在であるより実体的で真正の破壊を、互酬的な相互関係に対する根本的な打撃を、さし示しているのだからならぬ。スタに対して發揮される破壊的、解剖学的な情熱は、人間の身体に対して發揮される同様の情熱と、位相同型(homeomorph)であるとさえよつ。なぜならば、'aigaの空間戦略からみれば、両者のトポスは代替可能なものであるから。

14

Samoaの空間戦略はこみい、こみい、しかも大変に興味深い。それがこみい、こみい(ようにみえる)のは実は、たんに他の社会に比して良質な民族誌(ethnograph)に触れることができるという事情によるだけかもしれないが、それでもこの社会の、性/権力/言語の語契機の錯綜したなかに位置する交換システムの真相は、社会論理学の絶好の素材として十分に解読に値するものだ。実際、この社会には、「資本」というものが欠けてはいるのだが、それを除けばあらゆる社会の基本的な作用力がそこに関与してはいるとみられるからである。より詳細なデータを待たれる。

象徴財や貨幣類似物とともなう交換システムの知は多いが、そのなかでもとりわけ Samoaのfa'alavelaveが注目されるのは、ie togaの特殊性にもとづく。ie togaは、交換システムの作動を規範的に制約しているのであるが、それ自身、この Samoa社会の内部で「生産」される、社会の内生変数(endogenous variable)である。それは、さあめてありきたりの素材から、誰でも生産することのできる加工品、単なる手のこんだ「風呂敷」にすぎない。この事情は、さきの New Guinea 高地の裾巾敷が、交換システムの外から持ちこまれた見がうらあったのと、対照的である。(資本制的な貨幣にしても、金本位制下にある New Guinea の Pearl Shell に近く、管理通貨や SDR ということになると、多少に ie toga 的である、と言えよう。) 肝腎なポイントとは、ie toga の供給のされ方を探ること、いわゆる ie toga の生産関数を特定すること、である。それがどのようなものであるかに従って、ie toga の性質は大きく違ってくるとみられる。

ie toga が儀礼的な交換行為に介入して發揮する、規範的な拘束力は、どのようにして生じるものであるか? te/moka システムの Pearl Shell との類推

を言うなら、それは数量的な関係——ちょうど、貨幣数量説に言うような関係——として、考察しなくてはならないかと考えられる。New Guinea で生じたのは、供給増に原因する Pearl Shell の価値下落であった。こうして象徴財が交換財として稀少であるのは、それが少量であるからだ、ということになる。しかし、'ietoga のようにその原料がすこしも稀少でない、単純でしかも耐久性のある加工品の場合、それが少量しか存在しないということは、供給がきりめ細々としていっているということと同義になる。そして、なぜその供給が細々としていっているかといへば、産出/投入比が十分に小さいこと、すなわちいちがうしく手間がかかること、にその原因をおぼろしきがない。ここから、'ietoga が労働価値の体代物であるがゆえに、ちょうどその程度に稀少である、とする「'ietoga 価値説」まではほんの一步である。

似たような推論を、Malinowski が kula 交換の象徴財に関して試みている。

«…… 価値を主とするのは、たぐいまれな有用性ではなく、細工しうる素材のなかに人間の技術で探りだされた希少性である。……

価値のあるものとは、職人が特別にみごとな、あるいは奇妙な素材を見つけ、これに魅せられて不相応に大きな労力を費やして作った品物である。職人はどうすることによって、一種の経済的な奇形、つまり使うにはあまりによく、あまりに大きく、あまりにもよく、あるいは装飾があまりに過剰であるか。しかし、まさにそのために価値のある品物を作るのである。» ([1922=1967:210])

ここからわかっていっていることは、誤ってはいないが、分析的に十分厳密だとは見えない。第1に、上記のような加工品が（価値ある）交換財として登場するという事実があるかもしれないものの、それが「価値ある」ものとなるのは、交換システムという制度がそのように認定するからであって、それ以外ではない。第2に、加工品の価値に対して寄与するものが、①素材の希少性であるのか、②職人の技術であるのか、③不相応に大きな労力によるのか、判然としないうち、素材などに関する市場が存在しない自給経済の場合には、以上の寄与分をおのり決定できないのが当然ではあるのだが。'ietoga について言うなら、①、②については（いちおう）無視できると考え、③の投下労働量の過剰さが、'ie

toga を価値あるものたらしめていようとする実体であることになってくる。

'ietoga はゆえに不足していると言われる。人々は、fa'alavelave のために、'ietoga をかきあつめに走りまわす。もし 'ietoga がありまじりの素材から種作もなく製造できるものであるなら、そうしている暇には作ってしまう方が、はるかに簡単であろう。'ietoga の生産=供給に関してとりもたてて制約が存在しないのであれば、なぜ 'ietoga が足りないのに作られないのかは、説明に値する。

もしかすると、'ietoga 生産の努力は、十分な水準ですぐと継続されているのかもしない（民族誌から受ける印象ではどうもそういうことはなさそうだが）。この場合のひとりの考え方は、交換システムは（西欧との接触後）すでにここからはなはだしく変遷してしまっていて、伝統的な交換状況から外れてしまっている、しかも、'ietoga が財の交換を規範的に拘束する仕方は数量説の想定するメカニズムとはまったく別のメカニズムによる、と考えてみることである。もうひとつの、もっと現実性のある考え方は、'ietoga はいつでも足りない足りないと言われているのだ。しかしそういう当事者たちの印象があるからといって、本当に 'ietoga が足りない水準よりも不足しているわけではない、そういう印象はただ 'ietoga の稀少性を反映するだけのことであり、と考えてみることであり得る。

しかしいずれにせよ、'ietoga の数量と 'ietoga が規範的に示している交換比との関係はどのようなものであるのか、そして、どのような場合に人は 'ietoga を生産し、その活動と 'ietoga の数量とがどのようにリンクしているのか、という点は、fa'alavelave を理解しようとするとき、是非ともはつきりさせたいところである。そこでこの点を、もう少し詮索してみよう。

'ietoga が不足しているのに足りるだけ人々が作るうとしないうち、というのが事実であるとする、当然のことであるが、さかんに、現在存在している 'ietoga はちょっと多すぎるのではないかと考えられることに気づく。なぜなら、現在存在する 'ietoga のうち少くともある部分も、現在なら作るのがちょっとためらわれるような条件下で生産されたことになるから。'ietoga がいわば「無理やり」作らるるという状況は、いくつか考えられる。たとえばひとつには、かつて " 'ietoga を年に1枚は作るう " というような種類の規範が 'aiga を支

断っていたのだが、現在では廃れてしまった、と考えてみることに。この想定を支持する民族誌データが、みつかるともしい。もうひとつは、以前 matai の権力が大きかったため、女たちを集めて 'aiga のために 'ie toga を作りさせたこと、と考えてみることに。この事実を補強するデータが、あるようである。すると、現在では、'ie toga の供給形態がすっかり変化してしまっただろう。この想定に立つなら、以前には、'ie toga を借りあててくるのがむしろあつた種の 'aiga (特に高位 matai の) 一種の政治的孤立、並びに, fa'alavelave を機会に、何としても威信を發揮したいとする競争的にあつた動機が、考えてみてもいいといけな。

'ie toga に関してもっともありそうな筋書きは、二人なところではあつるか——伝統的には、交換システムは静態的に安定していたから、'ie toga の数量は fa'alavelave の回数も恒に一定であり、また 'ie toga の損耗と 'ie toga の新規生産とも釣り合っていた。ところが最近、貨幣経済の浸透も手伝って fa'alavelave の回数自体がふえてきたので、'ie toga の稀少性はさらに、事実として 'ie toga の数量が相対的に不足しはじめ、'ie toga が足りないという印象も広まってきた。しかし 'ie toga の供給はそれほど弾力的ではないので、この不足を生産によってカバーすることができずにいる。

このように考えてみるのはよいとしても、いくつか詰めておかなければならぬ論点がある。'ie toga の生産=供給と 'ie toga の損耗とは、どのようにして釣り合うことになっているのだろうか? 'ie toga が一枚ボロになるごとに一枚生産することになっている、と考えてもいいし、向かほかの仕組みによると考えてもいい。しかし 'ie toga がどう生産されるかという仕組みに関する仮定がちがえば、静態的に安定をみていた fa'alavelave の古典的なシステムが、貨幣経済との接触によってどのように変容していくか、というその後の挙動に大きく影響してくる。

fa'alavelave の古典的なシステムにおいて、'ie toga の存在量のある一定量にしているものが向であるかについて、いろいろ仮設してみるべきだろう。te /mka や kula の場合とちがって、'ie toga がシステム内部で生産される稀少財であるので、いわゆる「'ie toga 価値数」は絶対的に値する仮設であると思われる。この仮設は、'ie toga の生産=供給について、おおむねつぎのようにな

とを想定している。交換比率が 'ie toga に対して有利であり、極く少量の 'ie toga で大量の財(下タ)をうることで、結局その財を生産する手間もほとんど 'ie toga を作る方が容易であるとするれば、暇なときに 'ie toga をつくっておこうか、というふうな動機づけがはたらく。こうして 'ie toga が生産されていくと、交換比率は次第に反対側に動いていくだろう。また交換比率が 'ie toga に対して不利であれば、沢山の 'ie toga に対してわずかの財しか与えられないため、'ie toga を生産しても手間ばかりかかると割があわないという場合には、さきほとは反対に 'ie toga の生産は手控えられる。すると 'ie toga の存在量は、追加供給をうけないため次第に減少し、'ie toga の交換比率を改善するようにはたらく。——'ie toga の生産がこのようになされているとするには、たしかに 'ie toga は、そのに代用されている低下労働量を目安にして自動的に増減し、その価値を fa'alavelave において維持するようなある一定量に自らを調節するのである。この調節機能が敏感であれば、'ie toga の指定する規範的な交換比がその価値量と厳密に等しくなっていくべきである。またこの調節機能がそれほど敏感にはたらくものではないとすれば——たとえば、手間のほか、た 'ie toga もどうでいいのもあるにせよ、一枚、二枚……と教えられてしまうから、とか、'ie toga を編みあげるスピードに若い娘とベテランとはえらい違いがあるから、とか、いろいろ理由で——、'ie toga の存在量は、「'ie toga 価値数」を厳密に妥当せしめるような一定水準にはなく、その水準を中心としてある幅をもった一定範囲に、調整されるであろう。これもまた、ある程度の「'ie toga 価値」の現象形態ではあるのだ。

「'ie toga 価値数」の論理は、ほぼいまのバタようであるとしても、その当否を検証できるかどうかは、微妙な問題である。というのは、他処でものバタように、観察の結果データとして入手できる fa'alavelave の交換状況は、商品経済圏からもたらされた種々の産物を交換品目として含んでいるから、である。もしもまいデータが入手でき、しかも「'ie toga 価値数」が妥当することが言えたなら、それは掛値なしに大変な驚きをもってあかえられるべき事実であろう。これは、殆ど「生産的労働」ということについての概念をもたぬこつした自給経済の交換システムが、実はこうした論理にもとづく「労働価値」に支配されていた、という発見であるからであり、また、実証的な裏付けの乏しいとい

てきた労働価値説に対する側面からの援護となりうるからである。いったいに 'ie toga の規範的な拘束作用が 'ie toga の数量現象としてあらわれており、'ie toga の数量現象が 'ie toga の稀少性によって裏付けられ、'ie toga の稀少性を構成するのは 'ie toga に投入される生産的用途であるとき、'ie toga 価値説は妥当根拠をもつと言えよう。

'ie toga 価値説が妥当しないとしても、fa'alavelave の古典的なシステムにおいて、'ie toga の存存量をコントロールしているメカニズムを発見しなければならない、という課題は存在する。'ie toga 数量を、その価値と無関係にある水準に維持するためには、'ie toga 数量モデルに即した厳格な規範的な拘束関係（ $\times \times$ なる条件を満たすべくに 'ie toga を生産すべし）が各 'aiga に共有されていなければならない。'ie toga 生産に関わるこうした規範は、（今日廢れかかっているかもしれない）かつて存在したとすれば、開き二面調査等によつて発見される可能性がある。

15

接触後、貨幣が浸透することによって、伝統的な交換システムははかり知れない変化をこうむり始める。その初期の段階では、硬貨や紙幣が単品のかたちではいりこむだけであるかもしれない。このような段階では、その他の物品、たとえば銃撃ナイフやマツ干などが移入されるのと同じで、自給経済の交換メカニズムはまだ顕著な影響をこうむるには至らないであろう。なぜなら、貨幣が物的に移入されたとしても、貨幣の機能が入りこまれないからである。商品市場が貨幣とともにしられるようになる——すなわち、一方で、換金作物の生産や賃労働の発生など、貨幣を入手する一般的な機会が開かれ、もう一方で、外部の商品世界からここで生産された各種の商品が持ちこまれ商店などで販売されはじめ、誰でも貨幣をひきかえにそれを入手できるようになる——と、事態は決定的な段階へすすむ。自給経済と商品経済とは不可分に交錯しあひ、1個の複合的な秩序をなすに至る。そこから伝統的な交換経済のメカニズムばかりを引き出すことが不可能となる。こうした複合的なシステムを分析的にどのようにとり扱うかは、むずかしい問題であり、これまでに有効な方法がうみだされたとは信じられない。

貨幣経済の浸透が、太平洋の交換経済にどのような変容を及ぼした（及ぼしつつある）かは、資料が不足していること、そしてそれ以上には方法論的な準備が不足していることから、ここで多くを述べるわけにはいかない。ただいくづかのトピックはかりを述べてみよう。

New Guinea 高地を最近調査した Strathern は、いくつか興味ある記述を述べている。はじめ人々は、白人が見がらを狩るにむくので大層喜んだが、やがて見がらは白人が本当に使う power の源泉ではなると知るようになる。「見がらは白人が食べる食料の外側にすぎない。白人はなみと喰べて、外の見がらを残してしまふ。それを我々は持って、宝物にしていくのだ。」と言われはじめ。貨幣こそ、白人の真の power の源泉であると同時に、儀礼のなかで Pearl Shell に匹敵するかわるもの、と考えられるようになる (Strathern [n.d.:280])。一時下火となるかにみえた moka も、換金作物として導入されたユーピーが価値を失ったのをきかずに、再び盛んとなっていったらしい。big man は、オーストラリア政府の末端に組みこまれながら、貨幣経済へも適応し、なおも人々の間に根強いスタハの執着を手掛かりに、moka を管人しているという。

te/moka システムに対する貨幣の浸透の仕方と較べて興味深いのは、Samoa の fa'alavelave に対する浸透の仕方であるだろう。Samoa では、貨幣は象徴財 'ie toga の替りとなることではなく、またなほ oloa の側に位置する。これは、te/moka と対照的、と言えようかもしれない。この相違は、なにに由来するが？ te/moka システムはもともと、交換財のあいだに対立をもつていた。これは、単一の財、すべてを交換するためのシステムであり、象徴財はそれに付随するものにすぎない。象徴財の稀少性は数量関係のみで由来したから、システムの骨格を変えることなく、貨幣は見がらに代置しうる。fa'alavelave の場合には、象徴財 ('ie toga) と貨幣とのこうした類似性が、かえってその代置を不可能とする。貨幣は、象徴財と実体財との二重性を具えている。これは、'ie toga と対立させられ oloa の側に算入されているからこそ、実体財 (coupon) としてのいみを持ち、fa'alavelave の交換秩序の商品市場に対する独自性を喪失するには至らないのだ。かりに 'ie toga を貨幣が代置してしまうならば、システムは単純な持参金制度と異なることになるが、現在 'aiga をつないでいる 'ie toga を軸とした協力の網の目は打ちまわされてしまふであろう。

'ie taga は、伝統的な仕方では生産されるが、fa'alavelave の交換を男方にまわ
 るかしか、入手の可成はないうに好む。貨幣は、自然経済ではどのようにし
 ても生産できないかありた。商品市場では(銀行からの融資を含め)あらゆる
 仕方での調達できるからである。(了—本文72枚)

文献

(New Guinea)

Bus, G.A.M. 1951 "The Te Festival or Gift Exchange in Enga
 (Central Highlands of New Guinea)", Anthro-
 pos 64:813-824.

Elkin, A.P. 1953 "Delayed Exchange in Wabag Sub-district,
 Central Highlands of New Guinea, with Notes
 on the Social Organization", Oceania 23-3:
 161-201.

Bulmer, Ralph 1960 "Political Aspects of the Moka Ceremonial
 Exchange System among the Kyaka People of
 the Western Highlands of New Guinea", Ocea-
 nia 31-1:1-13.

Meggitt, M.J. 1974 " "Pigs are our Hearts!" : The Te Exchange
 Cycle among the Mae Enga of New Guinea",
Oceania 44-3:165-203.

Rappaport, Roy A. 1968 Pigs for the Ancestors: Ritual in the
 Ecology of a New Guinea People, Yale Univ.
 Press.

Strathern, Andrew 1971 The Rope of Moka: Big-Men and Ceremo-
 nial Exchange in Mount Hagen, New Guinea,
 Cambridge Univ. Press.

———— (n.d.) "Transactional Continuity in Mount Hagen",
 in Kapferer, Bruce (ed.) Transaction and
 Meaning: Directions in the Anthropology of
 Exchange and Symbolic Behavior:277-287.
 Institute for the Study of Human Issues.

野口 広 1978 「豚のサイクル」, 『数学セミナー』17-11:38-45.

Thompson, Michael 1979 Rubbish Theory: The Creation and De-
 struction of Value, Oxford Univ. Press.

1979b " ? ", in Mitchell, J. Clyde (ed.)
Numerical Techniques in Anthropology: - . .
 Institute for the Study of Human Issues.

(Samoa)

Mead, Margaret 1928 Coming of Age in Samoa, ?; 1961 William
 Morrow & Co. =1976 畑中幸子・山本真高訳, 『サ
 モアの思春期』, 蒼樹社.

Fairebairn, Ian J. 1973 The National Income of Western Samoa,
 Oxford Univ. Press.

山本 泰・山本真高 1980 「消費の禁止/性の禁止 — サモアの交換
 システムの構造分析 —」, (未発表).

———— 1981 「消費の禁止/性の禁止(1) — サモア社会における交
 換システムの構造 —」, 『東京大学新聞研究所紀要』29:
 67-186.

(else)

Douglas, Mary 1967 "Primitive Rationing: A Study in Controlled
 Exchange", in Firth, Raymond (ed.) Themes in
 Economic Anthropology, Tavistock Publications.
 :119-148.

Morishima, Michio 1973 Marx's Economics: A Dual Theory of Value
 and Growth, Cambridge Univ. Press. =1974 高須
 賢義博訳, 『マルクスの経済学 — 価値と成長の二重
 の理論 —』, 東洋経済 新報社.

Floud, Roderick 1973 An Introduction to Quantitative Methods
 for Historians, Methuen & Co.

Malinowski, B. 1922 Argonauts of the Western Pacific, ? , =
 1967 井田和夫・増田義郎訳, 『西太平洋の遠洋航海者』,
 『世界の名著』59:55-342. 中央公論社.

CN 109 ¥75.- Daisaburo HASHIZUME 1981-9-23